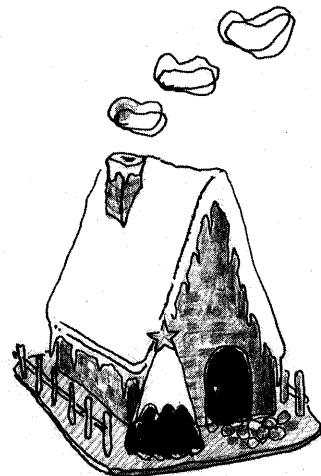


カレンダーづくりの楽しさ

湯沢 朱実



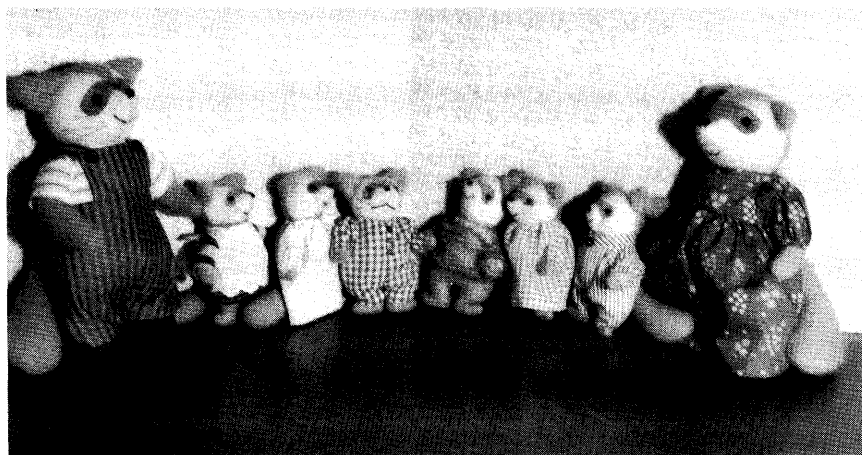
今年で八年目になる「ぬいぐるみカレンダー」づくりも、はじめは一年だけのつもりでした。

一九八四年、東京子ども図書館は十周年を迎え、基金を増やすためのキャンペーンをしていました。長い間、東京子ども図書館の支援グループとして活動してきた「手づくりはたのし工房」は、例年のバザー以外に、もっと大勢の方に協力していただく方法はないかと、知恵をしばっていました。私は工房の一員として、ぬいぐるみを作っていたのですが、その人形達が毎年バザーで売られてしまうのを残念がった夫が、写真に撮りはじめ、

それがだいたい溜っていました。その写真を基にできたのが一九八五年の第一作「こうさぎカレンダー」でした。

一八センチ×二三センチの小さなカレンダーは、どこにかけても邪魔にならず、送るにも簡単なことから好評で、資金集めの目的も果たして、大きな満足感を味わいました。

私にとって初めての印刷物が人の手に渡っていくと、買って下さった方から、「タンポポの三月が好きです」とか「キノコの傘をさしている六月がいい」とか「来年はどんな動物ですか」等、さまざまな好意的なご意見を



▲ タヌキの一家

いただきました。見ず知らずの方からのこのような働きかけは、新鮮な驚きでもあったのです。

一年限りのつもりでいた私達が、周囲の人達の励ましで次をどうするか迷っていた時、街でログハウスのミニチュアセットを見つけました。ねずみにびったりと購入したのが春休み直前、それから一週間、夫と二人の共同作業で高さ五〇センチの家ができました。早速、夫の勤務先のお茶の水女子大学に運び、構内のあちこちに家を置いて撮影です。まだ春休みで人気のない構内は、タンポポの咲く広場、花ダイコンのうす紫にうまった片隅、白い二りん草のかわいい姿、どこに置いても絵になるような気がして、一日で三か月分も写したでしょうか。なにしろ身の丈一五センチほどのねずみサイズですから、一メートル四方もあればたりますのです。幸か不幸か今のお茶大には人手の届かない所がたくさんあって、私達には宝庫なのです。

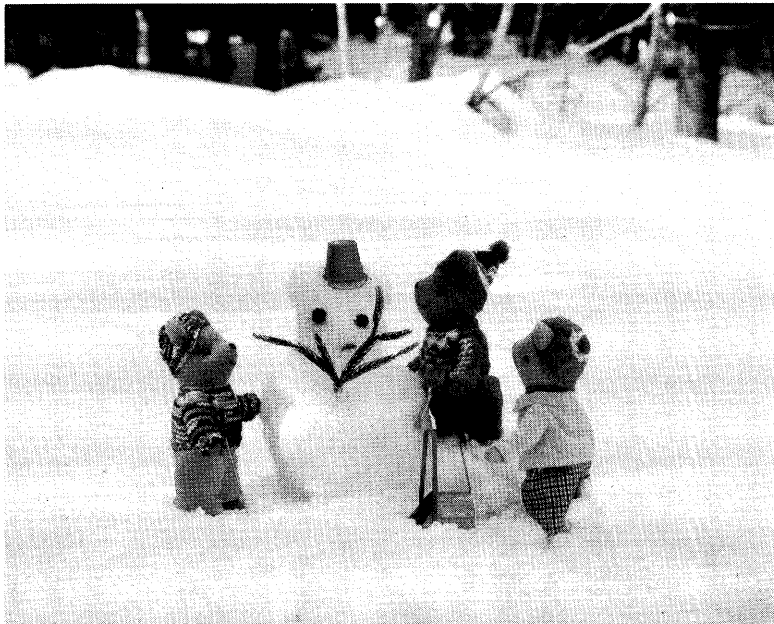
それからは、どこへ旅に出るにも二、四匹をつれて歩くことになり、夫の学会で行ったニューヨークでは、エ

ンパイアステートビルの上で写しました。このお上りさんねずみは残念ながら没になりましたが、その時求めた小さなヨットは日本の湖で短い航海をしました。

「どこへ行くにも」といっても、子ども達が大きくなってしまった我々は、そうあちこちへ行くことはありません。カレンダーづくりをする時の私の唯一の要求は、一か月一枚のカレンダーにしたいということでした。素人の手づくり人形を見ていただくには、せめて季節感をお届けしたいと思ったのです。それにはもつとどこかへ、それぞれの季節に行かなければなりません。こうして思いがけず夫婦二人で、ぬいぐるみをつれての旅がはじまりました。あんずの花咲く信州の里、早春の上高地、何十種という桜を集めた高尾の林業試験場、雪のためには越後中里のスキー場、一面に花咲くレンゲを求めて川越の畑へ、日本の四季は美しいと見直しました。

季節とは関係なく、人形の大きさに合った場所もあります。何度目かの海外旅行でオランダに行った時には、世界的に有名なミニチュアタウン、マドローダムで写し

◀ 雪の中で



たいと考えました。その年はたぬきでしたが、親だぬきは大きすぎて1/20のマドローダムには合いません。

そこで身長一六センチの子だぬきに大人の服を着せて、変身させました。他にうさぎは身長一二センチの特別サイズをつくり、ツアーの観光中に撮影しました。来
年一九九二年のくまの五月と九月は、大阪の花の万博で
写したものです。

ところで、外で写していると人の反応もさまざまです。外国ですと、まず子ども達が、寄ってきます。もちろん言葉は通じないのですが、とにかくそばまで来てあれこれ言い、人形を手にとってほおずりしたり、小道具に感嘆の声をあげるのです。親がとんできて交通整理？をしてくれるほどです。ところが日本では、通りがかりにちらちら横目で見て、仲間同士でヒソヒソ話すだけ、私達に直接話しかけることはありません。日本で話しかけて下さるのは、きまってお年寄りです。それも女性の方が積極的なのです。見知らぬ人に気楽に話すことが、その人達の自由度のバロメーターのように思えるのです

が、日本では子どもよりお年寄りの方がずっと自由だということでしょうか。

うさぎ、ねずみ、くまと三年たった時、できれば十年続けようと決めました。思えばその頃はまだ老眼鏡の世話にならずに、手仕事ができたのです。八年目の今では、制作担当の私が要老眼鏡なら、カメラ担当の夫も同じで、一日で三か月分のペースは少々きつくなりま
した。

しかし、八年間のカレンダーのためのアルバムを広げると、夫が出張先の広島でアンティークのミシンを支入れてきた時の私の驚きと夫の得意顔、ねずみの教室風景撮影中に、後ろを向いているおしゃべりねずみに注意をする夫の職業意識に大笑いしたこと、撮影直後にイカダから水中に転落したくまの救助騒動等々、子育て後の楽しい思い出の多くが、カレンダーづくりと共にあることがわかります。

花の情報を寄せて下さった卒業生や、次の機会にどうぞと小さな道具類を届けて下さる方、そして何よりも毎

年カレンダーを買って下さる大勢の方々のおかげで、私達夫婦二人のボランティアも実りあるものになってきました。

十年まではあと二年、どうやらそこまでは行きつけそ



▲ 雪の中のくまの親子

うですが、好きなことをしてお役に立つかぎりいつまでもやりたい気持ちと、老害にならないうちにやめねば、という気持ちの間をゆれているのが現在の心境です。

(東京都大田高等保育学院講師・ポケット文庫主宰)